

大西洋横断的視差 共感的知性の二律背反¹⁾

中山徹

W・E・B・デュボイスは『黒人のたましい』（一九〇三年）の「序想」に「二十世紀の問題は、カラー・ライン（皮膚の色）の境界線」の問題である（Du Bois）と書いている。では、この「問題」はどのように解決されるのか。デュボイスはいう。「カラー・ラインを越える、知性と共感の結合によってはじめて、正義と公正は勝利するであろう」（118-119）。ここで示唆されている解決は、しかし見た目ほど単純でも明快でもない。それは、「知性 intelligence と共感 sympathy」がそもそもどのような「結合」可能なのかという厄介な問題を引き寄せるから

さあ、とミュージズはいった
詩人が歌ったことのない歌を歌っておくれ
普遍なるものを歌っておくれ
—— ウォルト・ホイットマン「普遍なるものの歌」

だけではない。共感「カラー・ライン」を克服するどころか、逆にそれを強化する力としても使用されるからである。このことを示すうえで、ナチズム以上に強力な例はないだろう。ウィングダム・ルイスは「ナショナルな社会主義」（ナチズム）の説く Blutsgefühl——彼はこれを「血の本能 blood-instinct」あるいは「血縁感情 blood-feeling」と英訳する——についてこう述べている。「血の本能」——身のこなし、身体の色、かたち、におい——これがきずな——ただし差異ではなく類似性にもとづくきずな——となるべきである。なんととしても、この根源的

な人種―共感を促さねばならない。つまり、自分とは別の異質な文化に属する、あらゆるなじみのないものに対する最初の反応である本能的な反感を抑圧してはならないのと同じように、われわれの意識が人種―共感をいだけのを熱心に認めねばならない、そしてこれを熱心に維持せねばならない」(Lewis, *Hilfer* 105-106)。こうして共感とは、矛盾する二つの命題を生み出すことになる。定立…共感とはカラー・ラインを越える(人種横断的である)。反定立…共感とはカラー・ラインを越えない(人種内的である)。われわれはこの矛盾をどう解決すればいいのか。そもそもそれは解決可能なのか。一つ確かなことは、黒人解放運動もナチズムも、共感をその原理とする以上、この袋小路から抜け出さなければ自らの存立基盤を失う、ということである。

もしデュボイスとルイスとで「共感」によって意味されることと違うのであれば、問題はないだろう。だが、両者のいう共感とは根本的なレベルで一致している。ルイスのいう共感とは「身体的なひきつけあい」「身体的な連帯感」のことであり、それは「動脈や筋肉における同一の律動」を意味する (Lewis, *Hilfer* 107)。また彼は、「共感＝血縁感情」とはウォルト・ホイットマンのいう「振り向く瞳の語ること」を理解することであると説明する (106)。つまり共感とは、他者の「瞳」を通じて

身体的な「律動」を感じとることなのである。これと同様に、デュボイスにおいても、共感とは「率直に〔ある人間〕の目のぞきこんで、その心臓が赤い血で脈うっているのを感じる」と (Du Bois 117) として説明される。両者の共感概念は、知覚された何らかの身体的律動を基盤とする点において共通している。したがって矛盾は共感そのものからくるのではない。では、それはどこからくるのか。

デュボイスとルイスのあいだには、とはいえ注目すべき差異がある。デュボイスは、カラー・ラインを越えるのは「知性と共感の結合」であるといった。それに対して、ルイスのいう共感とは「知性」と結びつくものではない。共感が「血の本能」として規定された瞬間から、そこに「知性」が入り込む余地は奪われている。これはD・H・ロレンスのホイットマン論を想起させる。というのも、ロレンスもまた、ホイットマンの共感から知性的なものを排除することによってそれを正常化しようとするからである。「魂は魂と共感する。でも僕の魂を殺そうとするものを、僕の魂は憎む。僕の魂と肉体は一体である。魂と肉体は、清く完全であり続けたいと願う。ただ知力mindだけがそれを邪道〔倒錯 perversion〕に導く大きな力をもっている。知力だけが僕の魂と肉体を、けがれたところ、不健全なところに駆り立てようとする」(Lawrence 185)。⁶⁰ ロレンスが

いいたいのは、ホイットマンのいう「共感」は本来、徹頭徹尾、身体的な原理である、ということである。ナチズム的な身体的共感が「異質な」ものに対する本能的「反感」を生み出すように、この「生命の原理」は、私の「魂≡肉体」を脅かすものに対する「憎しみ」を自然に生み出し、受け入れるべきものの境界を確定する。しかし、「知力」が介入した瞬間、この共感の機能は失われる。共感とは、身体というそれ本来の存立基盤を離れ、憎むべきものとの「合一」をもたらし、ついには身体的経験の対象とはなりえない領域に流れ込む。ロレンスは、ホイットマンが身体的共感を「啓示」していると同時にこの「知力」の誤謬をおかしていると考ええる。ホイットマンは「すべて」に引きつけられ、「何一つ拒まない」(173)。彼の「魂は体内からたえず漏れ出し」、彼は「全世界、全宇宙となる」(174)と。ロレンスが、ホイットマンは「官能的な肉体を知性化 *mentalise* してしまった」(173)というのは、そのためである。こうしてロレンスは、ホイットマン自身のなかに二つの矛盾する命題——共感とは脱身体的である、共感とは身体的である——を見出すことになる。

共感をめぐる以上二組の定立・反定立(二律背反)は、内容的には異なっているが、その原因は同じである。それらは、共感を共感本来の作用域を超えた領域にまで「駆り立てる *drive*」

「知性」ないしは「知力」のはたらきによって生じるのだ。反定立の側に立つ者(ルイス、ロレンス)は、この「知性」の誤謬、「駆り立て」を批判しているのである。しかし、だからといって反定立の側が正しいわけではない。これらの二律背反は不可避免的である。それは知性的なものが存在するかぎり——ということとは人間が存在するかぎり——つねに発生するのだからその意味で「知性」を否定することはできない。反定立の主張はだから、いわば「知性」を括弧に入れておくにすぎない。しかし、この括弧入れは、それ自体「知性」による操作以外のなものでもない。身体的共感とは、それを不可能にする「知性」がなければ可能ではないのだ。こういってもよい。身体的共感とは、「知性」という例外によって支えられている、と。これによって反定立の側は、永遠の悪循環にとらえられる。そこでは「知性」の「駆り立て *drive*」を(括弧入れを通じて)否定すればするほど、「知性」の力がかえって強くなるのである。これは超自我のパラドクスに似ている。超自我の命令(欲動 *Impulse*)の満足放棄せよ)に従えば従うほど、罪の意識(欲動の満足捨てきれないという不安)は強くなる。

反定立の側は、超自我のパラドクスにも似た悪循環によって規定される。ということは、定立の側はこの悪循環からある種の脱出として位置づけられるのではないか——これが本論で

論じてみたいポイントである。ここで誤解を避けるために、あらかじめ二つのことを述べておきたい。第一に、本論は定立の側が正しいと主張するものではない。私はルイスとホイットマンの読解を通じて、定立の側も不可能であることを示すだろう。ロレンスは、ホイットマンは「すべて」「全世界」「全宇宙」になる、つまり普遍に到達する、といったが、むしろホイットマンの共感「すべてではない」（非「全体」）になる、普遍に達することに失敗する、というべきである。それは、あとで論じるように、「何一つ拒まない」、例外を認めない、その意味でやはり普遍的な彼の共感が、逆説的に生み出す必然なのである。第二に、この普遍に向かう動き——超自我のパラドクスとのアナロジーを敷衍すれば、普遍性（へ）の欲動——は、不可能ではあるが、けっして無力ではない。私の考えでは、「ナショナルな社会主義」に対する闘争というものがあるとすれば、それはこの普遍への欲動を置いて他にないからである。

私のこうした考えは、普遍性と特殊性をめぐる近年の理論的言説³⁾、とくにスラヴォイ・ジジエクのそれに多くを負っている。例えばジジエクはこういっている。「あらゆる理論的な闘争において——さらには倫理的、政治的な闘争はもちろん、バディウの主張するように美学的な闘争においても——鍵となるのは、特殊な生活世界から普遍性が立ち現れる瞬間である。わ

れわれは特定の偶発的な生活世界に完全に規定されている、それゆえ、あらゆる普遍性がこの生活世界の特徴をもち、そこに埋め込まれているという事実は解消できない——ここでは、こうした紋切型を逆転する必要がある。〔……〕飛躍的前進が起ころのは、厳密な意味での普遍的な次元が、特殊な文脈の内部から突発的に現れて、「対自」の状態にいたり、普遍的なものとしてそのまま経験されるときである。この対自の状態にある普遍性は、たんにその特殊な文脈の外部あるいは上部にあるのではない。それは、その文脈の内部に刻印されているのだ。この普遍性は、その特殊な文脈を内部からかき乱し、この文脈の内部から作用する。そのため、特殊なもののアイデンティティは、その特殊性の側面とその普遍性の側面とに分裂する」(Žižek, *Violence* 152 [強調は原文])。私はこの先もこの引用を繰り返し参照することになるが、この段階でいえるのは、第一に、「ナショナルな社会主義」は共感をつねに「特殊な生活世界」の存立基盤として用いるということ、第二に、それゆえ「特殊な生活世界から普遍性が立ち現れる瞬間」とは、われわれの文脈でいえば共感(的知性)の二律背反の発生を意味するということである。私のもくろみは、ジジエクのいう普遍性による特殊世界の壊乱を共感の問題にそくして記述することだが、ルイスの『ヒトラー』(一九三一年)ほどの題材としてふさ

わしいテキストはない。なぜなら、そこでは今述べた二つの点が絡み合い、かつ、その先に普遍性の問題への通路が開かれて
いるからである。

鍵となるのは、ルイスが、本論の冒頭で引用した「血の本
能」をめぐる一節に続けて書いた次の一節である。

ナショナルな社会主義は、この血縁感情を基盤とする。ウォ
ルト・ホイットマンのいう「振り向く瞳の語ること」——わ
れわれはこれを理解するように求められるのだ。しかしウォ
ルト・ホイットマンが（宇宙的な熱情、はち切れんばかりの
ずうずうしいロマン主義、普遍的友愛に対する抒情的崇拜に
よって）この種の肉感的な透視力を拡散に向けて用いようと
努めるのに対し、今日の血縁感情主義者がその透視力にうっ
たえるのは、凝集を高めるためである。というのも、この一
九世紀のアメリカの預言者は、この透視力を使って、どんな
人の頭にも（その人が「直立」し「人間」と認められれば）
思慮深い瞳を向け、そこに「振り向く瞳の語ること」を解読
するであろうから。しかしこの新しいドイツの血縁の神秘の
信者たちは、この偉大な革命的な感傷的ロマン主義者の目的
とは、反対の目的のために、人間の身体にうったえる（……）。

（……）血縁感情の教義は、同一の人種と文化に属する人々
が身体的な引きつけ合いによってますます密接に寄り集まる
ことを望む。これは真の身体的な連帯でなければならぬ。
動脈と筋肉における、また神経器官における同一の律動——
これによってわれわれは、熱情的な排他性を、同質的な社会
の枠組みを、与えられるべきである。この友愛の境界内にい
れば、われわれは異物の侵入から守られた状態で暮らせるだ
ろう（……）。(Lewis, *Hitler* 106-107) [強調は原文])

ここには、ホイットマンの共感（「振り向く瞳の語ること」を
「理解する」こと）の二律背反がきわめて純粹な形で現れてい
る。定立・共感とは「拡散」する。反定立・共感とは「凝集」する。
さらに、ここでの共感が「人々」を結び付ける原理、ホイット
マンのいう「魅きつけあう愛着 adhesiveness」であることを
ふまえれば、これは次のようにいいかえられる。定立・共感の
生み出す人々の集合は普遍的である（共感とは「宇宙的」「普遍
的」であり、「すべて」をめざす）。反定立・共感の生み出す
人々の集合は特殊である（共感とは「同一の人種と文化」とい
う「特殊な生活世界」の基盤であり、その内側でのみ作用す
る）。ここでは、通常は相容れない二つの運動（拡散と凝集）
あるいは二つのレベル（普遍性と特殊性）の短絡が起こってい

る。たとえていえば、われわれはまるでホイットマン的共感という名のメービウスの帯の上を歩いているかのようだ。凝集⇨特殊性から出発したわれわれは、この帯の上を進むうちに、その裏側、拡散⇨普遍性に達するのである。あるいは、「ドイツ」を出発したわれわれは、大西洋の反対側「アメリカ」に達するといってもよい。この意味で、ルイスにおける大西洋とは、普遍と特殊のギャップ、共感のメービウスの帯のねじれに付けられた名前である。

凝集⇨特殊性と拡散⇨普遍性は、帯の裏と表のようにけっして交わらないが、それは確かに同じ帯（ホイットマン的共感）の上にある。その意味で定立と反定立は、共感そのものにおいて媒介されている。いいかえれば、この二律背反、綜合不可能なギャップは、共感そのものに構造的に刻印されている。少し説明を加えよう。私は、共感の二律背反は「知性」による共感の誤使用から生ずるといった。それはここでも変わらない。ホイットマンは「身体的な引きつけ合い」である共感を、その「引きつけ合い」の及ばない領域（宇宙）にまで拡張しようとする。それは身体ではなく「知性」のはたらきによる以外にない。共感と知性的なものとの「結合」は、ルイスのテクストでは、はからずも「解読する」という動詞に現れている。「瞳の語ること」を「解読」できるのは身体ではない。「知性」で

ある。しかし、凝集的共感も「知性」を必要とする。なぜなら、そこでも「瞳の語ること」を「理解することが求められて」いるからである。そもそも「語り」とは言葉であり、「知性」なくして言葉の「理解⇨解読」はありえない。それにもかかわらず、ルイスによる凝集的共感の記述においては、身体の機能だけが執拗に強調され、「知性」のはたらきは完全に無視されている。そう、それは括弧に入れられているのだ。しかし、すでに述べたように、その括弧入れは「知性」によるものであり、よって凝集的共感には「知性」なしには成立しえない。このように共感には、それを定立・反定立どちらにおいて規定しようと、それ自体「知性」と身体の根源的な解消不可能な敵対関係によって規定されているのである。この意味でも——違う意味は、論が進むにしたがって明らかになる——「特殊な生活世界」の基盤である共感には、まさに「その特殊性の側面とその普遍性の側面とに分裂する」。

ルイスは、この共感における「存在論的な」ギャップを、共感に対する二つの視座のあいだの「認識論的な」移動によって得ているようにみえる。その移動は、大西洋横断的（トランスアトランティック）な形をとる。「ドイツ」（ヒトラー）からみれば共感凝集的にみえ、「アメリカ」（ホイットマン）からみれば共感拡散的にみえる、というふうになる。しかし、この差異

を、同じものを複数の視点、立場からみれば異なってみえるといった主観的、観察的な差異に還元してはならない。この共感の「認識論的」差異は、あくまでその「存在論的」差異の反映なのである。そのことは、いま確認しように、他ならぬルイス自身のテキストが語っていることなのだ。この意味で共感に関するルイスの思考は、ジジェク流にいえば、きわめて「視差（パララックス）」的である⁴。しかし、ルイスは、この大西洋横断的な視差（トランスアトランティック・パララックス）という自らの明察を、最終的には捨ててしまう。われわれは、共感の二律背反の定立と反定立のどちらが真かいうことはできない。それは決定不可能という意味ではない。どちらも偽だからである。なぜなら「共感は拡散的である」といおうと「凝集的である」といおうと、そもそもそこで前提とされている共感および共感的世界が、定位の場合は「知性」の誤謬によって、反定位の場合は「知性」のもたらず悪循環によって、不可能である（成立しない）からである。しかし、ルイスは、定立を偽として、反定立を真として位置づけてしまう。そしてこの二律背反を一連の単純な美学的、経済学的、文化的二項対立に還元してしまう。ソフト／ハード、ロマン主義／古典主義、貸付資本／小資本、ジャズ／フォークダンス……というふうな（この一連の二項対立においては、前項が定立の、後項が反定立の置き

換えである）。ウインダム・ルイスの「ファシズム」というものがあるとするれば、そのもっとも純粋な形はここにある。ルイスは単にヒトラーを称賛したから、あるいは一連の二項対立の後項を擁護したからファシストなのではない。そうではなく、共感の二律背反、視差的ギャップを解消し、それによって「ナショナルな社会主義」を「内部からかき乱す」「普遍性の立ち現れ」を抑圧してしまったからファシストなのである⁵。

このようにルイスのテキストは、ファシズムの問題を普遍性の問題とつなげて思考することをわれわれに強いる。そしてわれわれを、ファシズムとは「普遍性の立ち現れ」の抑圧であるという結論に導いていく。ここで注意すべきは、それが普遍性の「立ち現れ」の抑圧であって、単なる普遍性の抑圧ではない、ということである。後者の場合、普遍性が抑圧の対象たりうる対象、すなわち積極的な事象として措定されている。つまり、普遍性は肯定したり否定したりできる対象になっている。それに対して私が主張したいのは、普遍性は肯定も否定もできないような——「ある」とも「ない」とも判断できない、「ない」ものとして「ある」としかいいようのない——「立ち現れ」方をするということである。

私はそのことを、他ならぬホイットマンの詩、ルイスが「ナショナルな社会主義」を原理的に説明するうえで言及せざるを

えなかったテクストを通じて示したいのだが、それにはまず、ジジエックによる普遍性の規定を、角度を変えて読み直しておく必要がある。よく読めば、それが普遍性の規定であると同時に特殊世界の規定であること、そして後者の規定が二律背反的であることが分かる。まず、普遍性は特殊世界の「外部にあるのではない」。つまり、特殊世界に含まれないもの（その外部・例外としての普遍性）は存在しない。だがその一方で、普遍性は特殊世界の「内部に刻印されている」。つまり特殊世界においては、すべてが特殊であるわけではない。そうであるならば、彼はいつもの表現を使ってこういえたはずである。普遍性とは「特殊な生活世界のなかにおいてそれ以上もの」（特殊世界の「疎・密的」な核、対象a）、あるいは「特殊な生活世界の部分ではない部分（非部分の部分）」（普遍的単独性）である、と。もう明らかだろう。ジジエックはここで、ジャック・ラカンの有名な「性別化」の定式における「女性の側」の定式——「ファールの作用を受けていないXは一つも存在しない」「すべてのXがファールの作用を受けているわけではない」——を用いているのである。共感から真の普遍性が出来るとはどういうことか明確化するうえで、これ以上有効な枠組みはない。その普遍性は、この定式を満たすと考えればよいのである⁶⁶。つまり「ファール」を知性的共感に置き換え、「X」に身体なり主体な

りを代入すれば、以下のような共感的知性の二律背反、つまりは、普遍性の出来の条件が得られるのだ。定立・知性的共感の作用を受けていない身体・主体は一つも存在しない。反定立・すべての身体・主体が知性的共感の作用を受けているわけではない。

これでホイットマンを（ロレンスとルイスに逆らって）読む準備は、最低限、整ったように思われる。鍵となるテクストはもちろん、ロレンスがそこから「民主主義」の理想を引き出し、ルイスがそこから「振り向く瞳の語る思い」という詩句を引用した詩「大道の歌」である。とくにそのセクション「二」は、共感の原理がこのうえなく明確に書き込まれており、全文引用するに値する。

きみ、わたしが乗りだして見まわす道路よ、きみはここに
あるだけのものではないと、わたしは信ずる。

多くの見えないものもまたここにあるのだと、わたしは信ず
る。

ここには受け入れるという深い教訓があり、選り好みもなけ
れば、拒絶もない、

縮れ毛の頭の黒人も、重罪犯人も、病人も、無知文盲の者も、

拒まれることがない。

出産、医師への急な使い、乞食の放浪、飲んだくれの千鳥足、機械工たちの笑い興ずる一団、

家出した若者、金持ちの車、洒落者、駈落ちする男女、

朝早くの市場の商人、霊柩車、町への家具の引越し、町からの帰り、

これらは通りすぎ、わたしも通りすぎ、どんなものも通りすぎ、何ひとつ制止されるものはない、

受け入れられないものは何もなく、わたしにとって親しみもてぬものは何も無い。
(Whitman 179)⁽⁵⁷⁾

一見すると、ここには途方もない矛盾があるようにみえる。冒頭では「きみⅡ大道」に何か欠けていることが示唆されるが、しかし最後には「大道」には何も欠けていないことが断言されるのである。これはどういふことか。われわれは、この読解不可能にもみえる不可解さはどう対処すればよいのか。ホイットマンの論理に公正であること、それが私の答えである。そうすれば、矛盾とみえたものは一貫した論理に裏打ちされたものであることが分かり、見た目の不可解さは「普遍性の立ち現れ」のまとうテクスト性として了解されるだろう。

ここには、今導いたばかりの二律背反がきわめて純粋な形で

現れていないだろうか⁽⁵⁸⁾。ルイスもいうように、ホイットマン的共感とは他者の「瞳の語ること」を理解することを意味する。それゆえ、すべての共感とは「瞳」を見ることから始まる。共感とは確かにある種の「透視力 second sight」(ルイス)なのである。ホイットマンのいう「大道」とは、この透視力が発揮される場である(「わたしが乗りだして見まわす、道路よ」)。重要なのは、共感には限界がないこと、共感を外側から限界づけるものがないことである。つまり「受け入れられないものは何もない」のだ。これは先の定立(「知性的共感の作用を受けていない身体・主体は一つも存在しない」)そのものである。しかし、この限界・例外の欠如は、逆説的ではあるが、共感的世界の絶対的全体的性——「すべて」としての「宇宙」あるいは「同一の人種や文化」のような「一なるもの」——を形成しえない。こうした「すべて」や「一なるもの」は、すべての共感の対象が同時に存在し、一挙に把握されなければ——「すべてⅡ全体」を俯瞰できる、特殊世界の「上部」を設定しなければ——成立しえない。しかし、この成立条件は、共感の原則そのものと相容れない。共感とは、「通りすぎる」者同士のあいだで、その都度その都度、その場その場で、その時その時、生じなければならぬ。「黒人」から「町からの帰り(の人)」まで、共感の対象を一つ一つ数え上げるこの詩の身振りは、まさにこの共

感の原理を遂行しているのである。この発生をどこまで追っていても共感の終点、「すべて」に達することはない。要するに、共感の規則が遵守されるときには、すべての対象が共感の対象であるわけではないのだ。したがって共感の場である「大道」が「ここにあるだけのものではない、(you are not all that far)」状態にあるのは当然である。ここでは、まさに先の反定立が述べる「非・全体 not all」の定式が成り立つのだ(「大道」においては「すべての身体・主体が知性的共感の作用を受けているわけではない」)。

では、われわれはこの詩のどこに「普遍性の立ち現れ」を見出すべきなのか。この問いに答えるには次の点を銘記する必要がある。それは、特殊世界に「立ち現れる」普遍性は「対自の状態」にあるということだ。つまりジジエクは「即自の状態」の普遍性というものを暗黙に前提としているのである。これは何を意味するのか。普遍性は、その「即自(それ自体において)」から「対自(それ自体に対して)」への移行において「立ち現れる」ということである。

この詩において、普遍性は二つの次元のあいだを移行している。共感的知性——共感の知性的性格はいみじくも「教訓」という言葉に現れている——が「受け入れられないものは何もない」という原則を遵守し、一つ一つ「瞳の語り」を理解してい

くとき、それは確かに普遍的なものへ向かっている。しかし、普遍性はいまだ潜在的なものにとどまり、共感的知性はおのが運命を知らない。私は、これが「即自」の状態にある普遍性に対応すると考える。それはいまだそれにふさわしい概念(「すべて」「宇宙」の不可能性)に到達していないかぎりでの普遍性である。しかしすでに論じたように、共感的知性は普遍性に達しえない。普遍性とはその意味で、究極的には普遍性の失敗のことである。忘れてならないのは、この失敗が共感的知性にとって外的な制限によって起こるのではないということだ。失敗は、共感的知性それ自体の内的条件——例外・限界のなさ——によって起こる。したがって、共感的知性がこの失敗を認識する瞬間があるとすれば、いいかえれば、普遍性がその本質(不可能性)にふさわしい概念を通じて自らに向き合う——普遍性が「対自の状態」にいたる——瞬間(普遍性の第二の次元)があるとすれば、それは、共感的知性(「透視力」)の限界が共感的世界(「大道」)の「内部に刻印される」瞬間とならざるをえないだろう。詩にはこの瞬間が書き込まれていないだろうか。「多くの見えないものもまたここにあるのだ (much unseen is also here)」と、わたしは信ずる。「見えないもの」とは、まさに「透視力」としての共感の限界をしるすものである。しかしそれは「大道」の外部ではなく、あくまで内部、

「ここに」ある。「わたし」という共感的知性は、この「ここに」ある「見えないもの」を通じて、「大道」のなかにある「大道」以上のもの、「大道」の一部ではない部分、つまりは「自分の状態にある」普遍性の「立ち現れ」に出会っているのである²³⁾。

以上から、ロレンスとルイスがそれぞれホイットマンをどう誤読したか、彼に対してどう公正でなかったかが明らかとなる。両者は、ホイットマンの共感が「すべて」「一なるもの」には到達できないということを見逃した。ロレンスいわく、「宇宙は〔……〕つまるところ〔すべてを加えたあげく adds up to〕一つになる。〔……〕それがウォルトだ」(Lawrence 175)。一方、ルイスは、ホイットマンの共感によって「一なるもの」(「同一の人種と文化」)を構成しようとする。どうしてそんなことが可能になるのか。それはルイスが、ホイットマンのこだわった、あの共感の無限の足し算、「非一全体」としての普遍性を生み出すあの足し算を無視するからである。ルイスにとって共感とは、動脈、筋肉、神経器官における「同一の律動」としてある。それはもはや「透視力」を必要としない。一つ一つ「瞳の語り」を理解するという終わりなき営みは、もはや必要とされない。身体は、身体であるかぎりにおいて、つねにすでに、人種・文化を同じくする他の身体と「同一の律動」によっ

て束ねられているからである。

では、「一なるもの」を不可能にするはずの、「見えない」が「ここにある」内的限界はどこにいったのか。ルイスは、それを「ここにはない」(外的な)「見えるもの」(実体)に変換しているのではないか。彼の次の言葉にあらためて注目しよう。「同一の律動」〔……〕によってわれわれは、熱情的な排他性を、同質的な社会の枠組みを、与えられるべきである。この友愛の境界内にいれば、われわれは異物の侵入から守られた状態で暮らせるだろう。この「異物」とは何だろうか。ルイス自身はそれを「自分とは別の異質な文化」として規定しているが、それはおかしい。ルイスのいう通り人種共感が「凝集」する(「拡散」しない)のなら、それによって形成される文化は他の文化に「侵入」しないはずだからである。「侵入」するものがあるとすれば、それは文化を横断するもの、つまり、外的に実体化された限りでの拡散的、普遍的共感だけである。そうであるなら、「同一の律動」が「排他性」を与えているのもおかしい。むしろそれとは逆に、「一なるもの」としての特殊世界の同一性は、その内的な外傷的な核(普遍への欲動)を外部的に排除することによってはじめて可能となるのである。「ナショナルな社会主義」を支える原理であると同時にそれを「内部からかき乱す」はずのホイットマンの普遍性が、前者にとっての

外的な障害に変えられ、すでにふれた一連の二項対立の否定的な項の側に還元されるのは、そのためである。

ルイスは一九三九年に『ヒトラー崇拜』を書き、反ナチの立場を表明する。しかし、これはナチに対する根源的な批判にない。『ヒトラー崇拜』においても、興味深いことにヒトラーとホイットマンが対比されている。ただしここで強調されるのは両者の差異ではなく同一性である。「ウォルト・ホイットマンが大西洋の磯波に浸ったように、アドルフ・ヒトラーはワグナーの音楽に浸る」(Lewis, *Hilfer Cult* 61)。両者は視差的な関係、メービウスの帯の裏と表のような関係にあるのではない。ルイスは単にヒトラーの性格をホイットマンの性格によって特徴づけているにすぎない。ルイスはワグナーの音楽を「音楽のアーヘン」(61)と呼んだ。つまり彼はヒトラーにある種のドリアン・グレイ・タイプの間人——アーヘン吸飲者、ワグネリアン……——として描きたいのである。それは、ルイスがヒトラーを「女性的」で「世間一般でいわれる「芸術家タイプ」」とみなしていること(88)、ワグナーとヒトラーをそれぞれ「時代遅れのボルシェヴィキ」「現代風のボルシェヴィキ」(63)と呼んで両者を同一化していること、そしてなによりも、ヒトラーを「ホモセクシュアルな」「退化者」とし

て位置づけようとしていることから明らかである。ルイスによれば「横柄なホモセクシュアルの暴君」(88)フリードリヒ二世は、ヒトラーとよく似ている。「フリードリヒは退化者であったばかりでなく、ナショナル社会主義者であった」(321)。しかし、われわれは注意しなければならない。「女性的」「性的倒錯」「退化」「共産主義」といった要素を等号で結ぶことが、ナチ的な反ユダヤ主義言説のレトリックそのものであることに¹¹⁾。ルイスはいわば、言表のレベルでは反ナチ的であっても、言表行為のレベルではきわめてナチ的なのである。

したがってルイスは、二度あやまちをおかしたことになる。一度目は『ヒトラー』において、二度目は『ヒトラー崇拜』において。しかし、この二つのあやまちは同じレベルにはない。後者におけるあやまちは、いわば言表行為の主体がうそをついている(真実を隠している)、ということである。だが、あはかれる真実に「ナショナルな社会主義」そのものを批判する力はない。いいかえれば、そこにジジエクのいう「闘争」につながる契機はない。しかし、これにくらべて、一度目のあやまちは、よりラディカルな意味をもつ。『ヒトラー』においてルイスが、ホイットマンは「どんな人の頭にも(……)」「振り向く瞳の語ること」を解説する「いったとき、彼、ルイスは、確かに潜在的な普遍性、即自の状態にある普遍性をつかんでいた

からである。しかし、彼はそれを「立ち現れ」させること、自分の状態に移すことができなかった。あるいは、誤った形で「立ち現れ」させた、というべきかもしれない。彼は普遍性を、「ここににある」「見えないもの」ではなく、「ここにはない」「見えるもの」として、内的な不可能性ではなく外的な障害として具体化したのである。ルイスはいわば、正しいステップを踏んだ

が、その方向を誤ったのである。これはホイットマンからの、「この偉大な革命的な感傷的ロマン主義者」からの、後退以外のなにものでもない。ルイスのヒトラー論は、この意味でペンヤミンの有名な格言を引き寄せる。「あらゆるファシズムは、革命の失敗を示すあかしである」¹²⁾。

註

- (1) 本稿は、二〇一〇年七月十日、一橋大学で行われたシンポジウム「Modern Materiality, Subjectivity, and Memory: Theory, Fascism, and the New Deal」(研究科プロジェクト「トランスアトランティック・モダニズム」) 科学研究費プロジェクト「冷戦期リベラル文化の再検討」共催、Hitotsubashi International Fellow Program 後援) で読まれた拙論「The Transatlantic Parallax View」をもとにしてゐる。
- (2) セジウィックはロレンスを、イギリスのホイットマン主義者の承譜のなかにおおよそ次のように位置づける。J・A・シモンズとエドワード・カーペンターによって推進された、

「民主主義」を旨とする一種の政治形態としての男性同性愛は、ワイルド裁判によってその説得力を失い、そこからは「ロレンスの勝利」がもたらされた、というのもロレンスは最終的にホイットマンを「倒錯者」とみなしたからである。(と Sedgwick 216)。このシナリオに異論はない。ロレンスのホイットマンに対する同性愛嫌悪は、この引用(にある「倒錯」けがれた「不健全」などの言葉)からも明らかである。しかし見逃せないのは、セジウィックがホイットマン(に対する愛憎)とファシズムとの結びつきを示唆するにもかわらず、ルイスには一切言及していないことである。これは、彼女の枠組みではル

- (3) イスのホイットマン論(ナチズム論を読むことはできない、ということを示していないか。例として Baidou のパウロ論と、それを敷衍的に論じた Sathier の本および Zupancic の論文、そして「普遍的単独性」を革命論に援用した Žižek の *In Defense of Lost Causes* をあげておきたい。
- (4) 「視差」は、ジジエックが(その概念をカントから借りた) 柄谷行人の『トランスクリティーク』から借りた概念であり、そこからは大著 *The Parallax View* が生まれた。しかし「視差」についての説明は、便宜上ジジエックの別の本からとる。「視差」は、「一般的な定義にしたがえば、[...] 観察する位置の変

- 化によって、対象の位置がずれたようにみえること〔……〕である。もちろん、ここには哲学的なひねりを加えねばならない。観察された差異は〔……〕単に「主観的」なものではない。むしろ〔……〕主体と客体は対象内部において「媒介」されており、それゆえ、主体の視点における「認識論的」変化は、対象自体における「存在論的」変化をつねに反映している〔Zizek, *Living in the End Times* 244〕。
- (5) それゆえに、『ピトラー』におけるホイットマンとピトラーの関係を、いわゆる「原ファシズム」の伝統ないしは系譜の観点から理解することは本質的ではない。ルイスの鋭い読み手であるヒューイットもこの異にかかってる (Hewitt 184 を参照)。
- (6) 「普通の単独性としての普通」というパディウの概念は、ラカンの非-全体 not-all の概念にきわめて近い (Zupančič 285)。
- (7) 翻訳は、木島始編『対訳 ホイットマン詩集——アメリカ詩人選(2)』(岩波書店、一九九七年)六七一―六八頁によるが、引用者によって一部訳語が変えられている。
- (8) この段落の議論は、カントのアンチノミー論からラカンの性別化の定式を読解したコプチェクの仕事に全面的に負っている。Copjec, *Read My Desire* の第八章を参照。
- (9) したがってホイットマンの教えは、普遍は無限判断の対象である、ということだ。「普遍は見られる seen (肯定判断)とも「普遍は見られない not seen (述語の否定、否定判断)ともいえない。「普遍は非-見られ un-seen である(非-述語の肯定、無限判断)というしかないのだ。その意味でホイットマンの「見えならしめ」は、カントの「睿智のなまの」に似ている。それを知ることにはできない。
- (10) 「信ずる」ことはできても、無限判断については Zizek, *Trying with the Negative* 108-114 の議論で負うところが大きい。
- (11) ジェイムソンは、『ピトラー崇拜』以降も「ルイスにとってファシズムは、現状に対する革命的抵抗の偉大なる政治的表現であった」と論じている (Jameson 133)。異論はない。ただ私の関心は、ルイスが最後までファシストであったかどうかではなく、彼のファシズムを視差的にみることにある。ルイスがもっとも反ファシスト的であったのは、彼がもっともファシスト的であったとき、『ピトラー』においてナチスの「人種共感」を視差的にみていたときである、というふうに。
- (12) Theweleit 12-13 を参照。
Zizek, *First as Tragedy, Then as Farce* 73 に引用されている。

引用文献

Badou, Alain, *Saint Paul: The Foundation of Universalism*. Trans. Ray Brassier. Stanford: Stanford UP, 2003.

Copjec, Joan, *Read My Desire: Lacan against the Historicists*. Cambridge, Ma.: MIT, 1994.

Du Bois, W. E. B. *The Souls of Black Folk*. Eds. Henry Louis Gates Jr. and Terri Hume Oliver. New York: Norton, 1999.

Hewitt, Andrew, *Political Inversions: Homosexuality, Fascism, and the Modernist Imaginary*. Stanford: Stanford UP, 1996.

Jameson, Fredric, *Fables of Aggression: Wyndham Lewis, the Modernist as Fascist*. Berkeley: U of California P, 1979.

Lawrence, D. H. *Studies in Classic American Literature*. Cambridge, Ma.: MIT, 1994.

- erature. 1923. London: Penguin, 1971.
- Lewis, W.yndham. *Hitler*. New York: Gordon, 1972.
- . *The Hitler Cult*. New York: Gordon, 1972.
- Sanner, Eric L. *On the Psychology of Everyday Life: Reflections on Freud and Rosenzweig*. Chicago and London: U of Chicago P, 2001.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosexual Desire*. New York: Columbia UP, 1985.
- Theweleit, Klaus. *Male Fantasies. Vol. 2. Male Bodies: Psychoanalyzing the White Terror*. Trans. Erica Carter and Chris Turner. Minneapolis: U of Minnesota P, 1989.
- Whitman, Walt. *The Complete Poems*. Ed. Francis Murphy. London: Penguin, 2004.
- Zizek, Slavoj. *First as Tragedy, Then as Farce*. New York: Verso, 2009.
- . *In Defense of Lost Causes*. New York: Verso, 2008.
- . *Living in the End Times*. New York: Verso, 2010.
- . *The Parallax View*. Cambridge, Ma.: MIT, 2006.
- . *Tarrying with the Negative: Kant, Hegel, and the Critique of Ideology*. Durham: Duke UP, 1993.
- . *Violence: Six Sideways Reflections*. New York: Peador, 2008.
- Zupancic, Alenka. "The Case of the Perforated Sheet." *Sexnation*. Ed. Renata Salecl. Durham and London: Duke UP, 2000. 282-296.